

日本ジオパーク認定公開プレゼンテーションに参加して

市史編さん室 田村公利

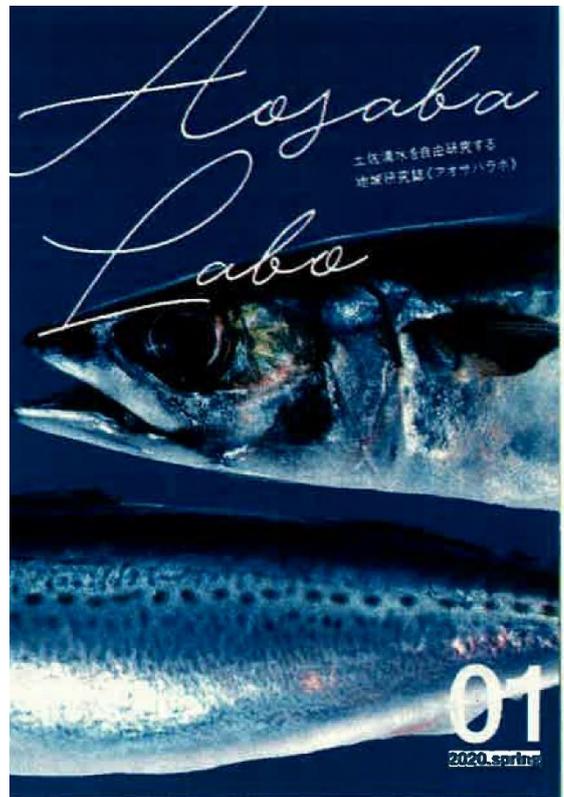
昨年度より土佐清水ジオパーク推進協議会から学術アドバイザーを拝命し、本市のジオパーク活動に郷土史の分野を主として関わらせていただいている。

先月29日(土)に日本ジオパーク認定公開プレゼンテーションがリモートにて開催され、土佐清水チームの末席で参加させていただいた。土佐清水市は、十勝岳、五島列島とともにプレゼンに参加し、これで3度目のチャレンジとなった。

プレゼンが終わり、審査員からの質問で印象に残ったのは、田中裕一郎委員(産業技術総合研究所)の質問だった。内容は、海成段丘についてだった。この海成段丘の地形を地元では古くから「駄場」と呼んでいる。「駄場」という苗字も存在するくらいだ。この駄場は特に足摺半島で発達している。田中委員は、この駄場と人とのつながりについての質問であった。地形や自然環境とそこに生きる人々との関わりは、地理学における基本中の基本であり、押さえておかなければならないことである。

足摺半島の海成段丘面では、縄文時代の石鏃が多く表採されている。その石鏃は、灰白色であり、九州姫島産である。四万十市の考古学研究者木村剛朗氏はこの足摺半島で複数の遺跡を発見している。このように古くから駄場では、人々の生活の営みがなされてきたのである。

駄場の端部は、タブやモッコク、サンゴ樹等の大木が並び、これが駄場に点在する家屋を潮風から守った。平地は水脈が近くにある場合は水田として、遠い場合は畑地として利用された。また、津呂地区では、ツバキやウバメガシに生垣があり、文化的景観を広げている。



↑土佐清水ジオパーク推進協議会発行『アオサバラボ』



↑リモートによる日本ジオパーク認定公開プレゼンテーション

また、段丘上は陽光や潮風が当たり、暖かく、文旦や小夏等の柑橘類がよく育つ。野辺にはツワブキが群生し、春には茎の皮を剥き、それを水にさらし、炒めたり、煮たりして食べる。私は豚バラとツワブキをゴマ油で炒め、甘辛のしょうゆ味で絡めた物が大好きだ。ツワブキは捨てる場所が少ない。光沢のある濃い緑色の葉も、ツワ寿司として利用される。ツワ寿司は「押し寿司」であり、木枠の底にツワの葉を敷いて作られる。郷土料理として足摺半島では昔から宴席などでよくふるまわれていた。ツワの葉から伝わるほのかな香りは食欲をそそった。



↑ツワ寿司(『アオサバラボ』31 頁引用)

このように海成段丘とそこに住む人々の営みの物語は、縄文時代から連綿と継続して培われてきたものである。その歴史の深さをあらためて認識させていただいた日本ジオパーク認定公開プレゼンテーションであった。

夏には、現地研修による審査も行われるとのこと、ジオガイドさんを中心に地形や自然環境の中で土佐清水市の人々がどのように生活してきたかを審査員の方々にストレートに伝えることができれば日本ジオパークの認定は間違いないと確信する。

いずれにしても、ジオパークは地質だけではなく、地域住民がどのように生きてきたかという生活史の部分も大切な要素だと思う。その意味で市史編さん事業とジオパーク活動がリンクすることにより、より大きなジオパーク活動の推進力・相乗効果につながっていくと考える。

【編集後記】

第1回市史編さん・編集合同委員会でお知らせしたように、著作権許可申請が必要な写真や図表などの資料があれば、配布した用紙にまとめておいて、10月頃までには市史編さん室にそれを送付ください。

先日、ある報道番組を視聴していると、世界的危機は10年毎に発生していると報道されていた。1990年「バブル崩壊」、2000年「アジア通貨危機やITバブル崩壊」、2010年「リーマンショック」、2020年「新型コロナウイルス」である。1989年日本はGDPシェア14%だったのが、2019年現在で6%まで後退した。時価総額トップテン企業が1989年当時日本7社(米国2社)、2021年現在では日本は0社(米国7社・中国2社)となっている。このままでいけば日本は、10年後の2030年には後進国に転落する可能性があることを警告していた。

人口面でも100年後には世界の人口も4000万人台にという試算もあるようだ。未来の日本を、郷土を守るためには、歴史から過去を学び、今なすべき課題をやり遂げ、次の世代へとバトンをつなぐことが不可欠である。市史編さん事業もその意味で大変意義が大きい仕事である。(田村公利)